

ジョン・キーツの詩における革新の詩学

後藤, 美映

<http://hdl.handle.net/2324/4475222>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (文学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏名	後藤 美映			
論文名	ジョン・キーツの詩における革新の詩学			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	鶴飼 信光
	副査	九州大学	准教授	高野 泰志
	副査	九州大学	准教授	武田 利勝
	副査	九州大学	名誉教授	山内 正一

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、イギリスのロマン主義時代の詩人ジョン・キーツ(John Keats, 1795-1821)の革新的な特質を、18世紀末から19世紀初頭の歴史的、政治的な文脈のもとで考察し、19世紀中葉のヴィクトリア朝以降キーツに与えられた芸術のための芸術を謳う「美」の詩人像を塗り替える、近代的革新性を旨とする新たな詩人像を提示するものである。

序論、結語以外に4部10章から成る本論文の第1部『『ハイペリオン』—近代的叙事詩の創出』は、キーツの叙事詩『ハイペリオン』を中心に考察し、国家の威信と安寧を証明すべきものとされた叙事詩の伝統に反し、また、理性、秩序、中庸を肯定する当時の美学的規範であった「趣味」(taste)の概念から逸脱し、『ハイペリオン』が、ミルトンの『失樂園』、ダンテの『神曲』の影響を受けながら、過剰なほどに鮮烈な身体的感覚の表現を通して、人間の苦痛や喜びという「共通の感情」を表現しようとしていることを明らかにしている。

キーツは、ハント、バイロン、シェリーとともに「コックニー詩派」と名付けられていたが、本論文の第2部「南の知の哲学—イタリアに視座をおいたコックニー詩派のコスモポリタニズムに見る革新性」は、ダンテの『神曲』の地獄篇に影響を受けたハント、キーツの恋愛詩の考察しながら、その詩派の共同体意識が、イギリス本国を第一とする志向と対照的な、汎ヨーロッパ的外向性や身体性を歌う南欧的特質を持っており、それがキーツの詩的革新性の基盤となっていることを、その詩派がピサで創刊した文芸雑誌『自由主義者』に見られるコスモポリタニズムを踏まえながら、明らかにしている。

第3部「オードにおける表象の多様性—反帝国主義と公共圏に基づく詩作」はキーツの「ナイティンゲールへのオード」と「ギリシャの甕のオード」を取り上げ、前者において表現される衰弱する消化不良の身体空間が、当時の「肥満」する経済、政治へのアンチテーゼとして機能し、イギリスのナショナリズムと帝国主義への批判となり得ること、後者が、理想美としての古典的美の特権を打破する、美の表象の多様性を提示していることを、19世紀初頭の近代国家の存立と、それとは対照をなす、ブルジョワジーによる「対抗的」公共圏の誕生という枠組みを視野に入れながら、説明している。

第4部「身体、美学、医科学をめぐる詩と革新性」は、キーツの「身体の詩学」とも言うべき革新性を、1918年の湖水地方からスコットランド北部高地への徒歩旅行中の書簡や詩で描かれるイギリスの自然が、伝統的美学や牧歌的なイギリスらしさに収斂するのではなく、身体性を基軸とした現実の諸相を反映しているという観点、キーツの詩を特徴づける身体的イメージが、保守派が高尚

な「趣味」を描くべきとする詩作において、“taste”のもう一つの意味である「味覚」と消化の感覚に重きを置いたものであるという観点、そうしたキーツの身体観に、感覚器官と脳が神経網で結びつけられ、各部が呼応し合う身体という全体を構成しているという当時の最先端の医学的知識をキーツが学んでいたことの影響があるという観点から、考察している。

本論文は、キーツが個々人を国家に好都合なように画一化しようとする保守勢力に抗し、個々人が身体感覚という共通の基盤を共有しながら多様に感じ、知を交換し合う自由な社会を志向する革新性を持っていることを、個々の詩作品の綿密な解釈に基づきつつ、多角的に明らかにする非常に意義深いものと評価できる。